

【資料】『第二言語習得・教育の研究最前線』の論文書式

本科研の成果を論文集として発行するにあたって直面した問題点の一つが、日本語教育の世界では投稿論文の書式が細かく定められておらず、細部においてはその時々執筆者や編集者の裁量に任されているところが意外に多いということであった。そこで、歴代の編集事務局実行委員が中心になって『言語文化と日本語教育』『日本語教育』『第二言語としての日本語の習得研究』『心理学研究』などの投稿規定を参考にしつつ試行錯誤を重ねながら執筆要領を作成し、投稿者に配布した。その要領の最新版（2004年発行の論文集で採用したのとはほぼ同じもの）を以下に掲げる。

1. 各章・節・項の見出し

- ・見出しの章番号は半角：半角数字＋半角ドット＋半角スペース＋章の見出し
いい例： 1. はじめに 2.1.1 海外での研究
悪い例： 1. はじめに 2. 1. 1 海外での研究
- ・章と章の間だけ1行空ける。節・項などの間は、空けない。
(2.1 から 2.2 に行くときや、2.1.1 から 2.1.2 に行くときは、行を空けない。)

2. 図表

- ・図表と本文の間は、1行ぐらい空ける。
- ・図表は余白にはみ出してはいけない。
- ・図表のフォントの種類は原則として本文に合わせる。
⇒明朝－Times New Roman の組み合わせ
- ・図表のタイトルのフォントはゴシック－Arial の組み合わせ。太字にはしない。
- ・表のタイトルは表の上、左詰にする。
- ・図のタイトルは図の下、中央揃えにする。

3. 注

- ・本文中の注番号を入れる位置
注をつけたい部分の直後に脚注番号（半角の算用数字 1,2,3）をふる。
「、」「。」などの句読点がある時は句読点の前にふる。
- ・本文中の注番号は、ピリオドなし ⇒ 「1.」ではなく、「1」
- ・稿末の注の番号の後ろには、ピリオドを入れる。

4. 本文中での引用

- ・カッコは半角にする。

(1) 一つの論文の場合、

- ・ 著者+(出版年)の場合：著者+半角スペースなし+(出版年)

いい例： 松田(1998) ⇒半角スペースなし

悪い例： 松田 (1998)

※ただし、文献リストには半角を入れる。

例： 松田 (1998) ⇒著者+半角スペース+出版年

- ・ (著者+出版年)の場合：(著者+半角スペース+出版年)

いい例： (松田 1998) ⇒半角スペースあり

悪い例： (松田 1998)

(2) 複数の論文の場合

- ・ 同一著者の複数の文献の場合：半角カンマ+半角スペース

例： 寺村(1980, 1981) ⇒著者(出版年+半角カンマ+半角スペース+出版年)
(寺村 1980, 1981)

⇒(著者+半角スペース+出版年+半角カンマ+半角スペース+出版年)

- ・ 著者が異なる複数の文献の場合：半角セミコロン+半角スペース

例： (Gass 1979; Pavesi 1986; Sadighi 1994 等) (窪田 1999; 堀口 2000)

⇒(筆者+半角スペース+出版年+半角セミコロン+半角スペース

+次の論文)

(3) 直接引用の場合

- ・ 直接引用でページ数を書く場合：出版年+半角コロン+半角スペース+ページ数

例 1： 益岡(1997: 26)によると・・・、

例 2： 「・・・・・・・・・・」(益岡 1997: 26)。

- ・ 引用された文面だけを引用符にいれ、出典や訳者に関連する情報は引用符の外に書く。

例 1： 「・・・・・・・・・・」(鎌田 1989: 32)

例 2： 「・・・・・・・・・・」(本稿筆者訳)

- ・ 原典ではなく、翻訳からの直接引用の場合は、原典・翻訳両方の出版年を明示する。

例：(Baker 1993/1996: 136 訳とページ数は岡の訳書による。)

(4) 著者が3人以上の文献の場合

- ・ 本文中で最初に参照するときだけは全員の名前を書き、2回目以降はet al.を使う。

例： 初出 Yamashita, Stowe & Nakayama(1993)

⇒著者 1 + 半角カンマ + 半角スペース + 著者 2 + 半角スペース + &(半角)
+ 半角スペース + 著者 3

2 回目以降 Yamashita et al.(1993)

※著者が 2 人のときは、本文中でも参考文献でも&を使う。

(5) 多くの文献を一度に並べる場合

- ・参考文献リストの順にしたがう。

(Croteau 1995; Doughty 1991; Eckman, Bell & Nelson 1988; Gass 1979, 1982; Hansen-Strain & Strain 1989)

(6) 本文中で欧文文献に言及する場合、アルファベット表記を原則とする。

いい例： Ellis(1994)

悪い例： エリス(Ellis 1994)

(7) 本文中で雑誌、書籍について言及する場合、和文は『 』を使用する。欧文は引用符を使わずにイタリックにする。

例： 『日本語教育』 *Studies in Second Language Acquisition*

5. 参考文献

- ・参考文献リストには、本文で言及した文献だけを載せる。
- ・本文中で言及した文献は全て参考文献リストに挙げる。
- ・著者が日本人でも、欧文で書かれた論文は、欧文文献に入れる。
- ・参考文献のスペルチェックは念入りに行う。(マイクロソフトワードのスペルチェッカーをかける。)
- ・書き方は、下記の雛型に準じる。

邦文文献

書籍

水谷信子 (1985)『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版

雑誌論文

坂本正・窪田彩子 (2000)「日本語の関係節の習得について」『南山大学国際教育センター紀要』1, 114-126.

書籍論文集の一部

長友和彦 (1998)「第二言語としての日本語の習得研究」橋口英俊・稲垣佳代子(編)『児童心理学の進歩 1998 年度版』金子書房 79-110.

欧文文献

書籍

Brown, R. (1973) *The first language: The early stages*, Cambridge, MA: Harvard University Press.

雑誌論文

Dulay, H. & Burt, M. K. (1973) Should we teach children syntax?, *Language Learning*, 23, 245-258.

書籍論文集の一部

Clahsen, H. (1984) The acquisition of German word order: A test case for cognitive approaches to L2 development, In R. Andersen (Ed.), *Second language: A cross-linguistic perspective*, Rowley, MA: Newbury House, 219-242.

(原典ではなく)翻訳を読んだとき

Comrie, B. (1989) *Language universals and linguistic typology: Syntax and morphology*, Oxford: Blackwell. (松本克巳・山本秀樹(訳) 1992 『言語普遍性と言語類型論』 ひつじ書房)

(1) 邦文文献・欧文文献とも

- ・同一著者の場合は、線ではなく、すべての文献に名前を書く。
- ・論文の場合は、ページ数を入れる。
- ・同一著者が同じ年に複数の文献を発表した場合
…(2001a), …(2001b)のように出版年の後にアルファベットの小文字を付加する。
a,b, …の付け方は、論文の中で言及されている順にしたがう。
- ・ページは、「pp.」は使わずに、数字のみ。
- ・ページは、「350-62」ではなく、「350-362」とする。
- ・編集書籍に載っている論文の場合
著者＋出版年＋論文題目＋書籍編集者＋書名＋出版社＋ページ
(欧米の出版社の場合は、出版社の前に地名)

(2) 欧文文献（原則として全米心理学会 American Association of Psychology の書式にしたがう。）

- ・著者の姓（ラストネーム）以外は、イニシャルで。
- ・論文名は、引用符（“ ”）に入れない。
- ・書名、雑誌名はイタリック（斜字体）
- ・カンマを正しく入れる。ピリオドを打つのは最後だけ。
Ellis, R. (1994) *The study of second language acquisition*, Oxford: Oxford University Press.
Gass, S. (1979) Language transfer and universal grammatical relations, *Language Learning*, 29, 327-344.
- ・雑誌名は content word の頭文字を大文字にする。

例： *Studies in Second Language Acquisition*

- ・書籍名、論文名は、題目・副題の冒頭、固有名詞の語頭、大文字の略語のみを大文字にする。

例： *The first language: The early stages*

例： *The acquisition of German word order: A test case for cognitive approaches to L2 development*

例： Japanese, UG, L2 など

- ・University Press は、略記 (Univ. など) しないで、University Press と正式の綴りを書く。
- ・雑誌名なども、略称 (SSLA など) を使わず、正式名称を書く (*Studies in Second Language Acquisition*)。
- ・アメリカの州名は、MA, CA のように 2 字の略称で書く。
州の略称については、<http://homepage1.nifty.com/isso/state/states.html>
参照
- ・編集書籍は、編者名のあとに、(Ed.) または (Eds.) と書く。
編者が単数名の場合は (Ed.) 編者が複数名の場合は (Eds.)
- ・編集書籍の編者名は、Andersen, R. ではなく、R. Andersen のように書く。
- ・やむをえず翻訳を読んだときも、原典の書名等を必ず入れる。
Comrie, B. (1989) *Language universals and linguistic typology: Syntax and morphology*, Oxford: Blackwell. (松本克巳・山本秀樹(訳) 1992 『言語普遍性と言語類型論』 ひつじ書房)
- ・版を入れる必要がある場合は、次のようにする。
Heiberger, M. M. & Vock, J. M. (1996) *The Academic Job Search Handbook*, 2nd ed., Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

(3) 邦文文献 (原則として日本心理学会の書式にしたがう。)

- ・姓と名の間はスペースを入れない。
ただし、姓と名との境がはっきりしない場合は全角スペースを入れる。
- ・共著の場合は、各著者名の間に「・(全角中黒)」を入れる。
- ・各巻通しページ付き雑誌論文の場合、号数は書かない。(欧文文献の場合も同様)
中川聖一・小林聡 (1995) 「自然な音声対話における間投詞・ポーズ・言い直しの出現パターンと音響的性質」『日本音声学会誌』 51, 202-210.
*通しページなので、51 巻の中の 3 号であることを示さなくてよい。
- ・各号ごとのページ付きの雑誌論文 (通しページではない) 場合、巻数の直後に号数を () に入れる。
南不二男 (1993) 「連想と言語研究」『日本語学』 12(9), 4-11.

- ・雑誌名の後ろに号数のない場合

『日本語教育学会予稿集』12-15 ⇒スペースを空けずにページ数を書く。

(4) 上記以外の言語の文献（中国語、韓国語、タイ語など）

- ・中国語・韓国語・タイ語などの文献を引用した場合、原語で書誌情報を書いたあと、
（ ）に著者名の読み方、論文のタイトルの日本語訳などを入れる。

例（韓国語の場合）：

서지영 (1994) 「대화상의 플랜 작성」 『화용론논집』 제 2 집, 61-74. (ソ ジ
ヨン 1994 「対話上のプラン作成」 『話用論論集』 第 2 集, 61-74.)

例（中国語の場合）：

潘鈞 (1995) 「中日同形詞詞義差異原因浅析」 『日語学習与研究』 3, 19-23.
(潘鈞 1995 「論文のタイトルの日本語訳」 『雑誌名の日本語訳』 3,
19-23.)

- ・英数字、日本語以外のフォント（ハングル、簡体字、繁体字、タイ文字、特殊な数学記号・発音記号など）を使用した場合は、その旨を送り状に明記する。

(5) 新聞記事

- ・発行年月日と記事の見出しを明記する。

例： 日本経済新聞 (2001) 5/28 「外国人技術者 採用を拡大」

6. その他

- ・欧文の語句や文を囲む場合は「 」で囲まずに、“ ”を使用する。